

## 小天地

汀 鷗

いちご

晝食後の小閑を、庭下駄突かけて畑に下りたつ、數百株の苺の苗には、おの／＼いくつかの紅き實をつけたり。茂れる葉をかき分くるに、忽ち鼻を撲つは、初夏ならではふさはしからぬその高き香なり。

花さき實の色づく時こそ、俄かに雜草も刈り藁をも敷け、日ごろは見向もせてうち捨ておくものから、實の形も整はず、その數も多かられど、まれには牡丹の蕾ほどの大なるものもありて、一つ／＼指もて摘みとる紅ぬの珠は、いつか籠に満ちて溢れんとすなり。

われはこの甘酸き夏の新しき香を嗅ぐ時、莖をさぐりて其實をつみ籠に入るゝ時、いつも身の幸福の淺からぬを感ずこと切なり。(五月二十日)

### 庭の花

前月の末迄わが庭を飾つてゐた木蓮、乙女椿、霧島、桃、杏、李、棠の花、紫雲英、さくら草、わすれな草、庭梅、すみれ、くさいちご、たんぼ、きんぼうげ、ワイルドポピー、紫のそら豆の花、さぎ草、おだまきなど、それ等の美しい花の多くは跡方もなくなりて、今は若葉青葉のいや繁りに茂る中に、一團の紅を彩る牡丹花、下くさにまぢりてあかき花かたばみ、朱のいろ

ことに鮮かなる石榴の花、姿なほやかなる紫露艸など、指おり數へるまでもなく、庭の面はいと淋しうなりぬ、月見草の蕾の、このごろいたくふくらみたる、やがては宵々ことの樂しみをますべきか。(五月二十二日)

### さぐす

朝な／＼關口の流れの音にまぢりて、二聲三こえ雉子の啼音をきく、窺かに庭に下りたち見れば、露ふかき畑のあたりを、餌をあさりて徘徊する氣高き姿見ゆ。關口より高田へかけて十數町、川に沿ふても古りたる樹の深き林をなせば、山鳥も居らん、雉子も栖まん、さばれこれ迄曾てさることのあられば、或は人の取逃したるにもや。(六月一日)

### 螢

「アラそつちへゆきましたよ」あの木の下よ」「あそこにも一つ飛んでいてよ」珍らしと見たちのさばぐに、窓おしあけ見れば、それらしきものも見えて、宵闇の暗き中を、江戸川に沿ふてながく二條の電燈きらめき、晴れたる空に満てる星の光あざやかなり。「ちよいと上をこらん、あんなに澤山はたるが居ますよ」。(六月六日)

### 月見草

一つ、三つ、十一、宵々毎にその數をましてゆくこの花は、レモンエローライトを塗りても其涼しげなる感じは出でまじ。軟風膚に快よき夕、この花のほとりに立ちて、その蕾の徐々に開くを見る、この瞬間、身は神の國のものなり。(六月十日)